Japanese Association for Religious Studies

小川圭治著

『神をめぐる対話――新しい神概念を求めて――』

新教出版社　二〇〇六年一月三一日刊
A5判　x＋三四四＋一二頁　五四〇〇円＋税

花岡永子

本書は、高度なバルト神学解釈を土台とした神概念の探究の書である。著者は周知のように一九六〇―一九六三年までバーゼル大学神学部のカール・バルトのもとで神学の博士論文を執筆している。それ故もあってか、バルトの神理解を遠く外れた議論は、本書には見られない。本書は、二〇〇五年に至る迄の約二十年間の、各篇がそれぞれ一章となっている、神をめぐっての十八篇からなる論文集で、Ⅲ部構成であり、各部は六章（論文）から成り立っている。

本書の「はじめに」に書かれているように、第Ⅰ部では神・人間・自然の三一論的構成による近代的神概念の構造分析が著者の根本的に特徴となる思考となっている。また第Ⅱ部から第Ⅲ部に亘っては、後述のように、五段階構造による神概念の類型論的構造が著者の神概念の理解における基本的方向となっている。本書の中心的な神概念は、キリスト教神学での父、子、聖霊の三一神の神において出会われる現実的な歴史における神と見なされている。

本書の各章となっている各論文においては、それぞれのテーマでその時代に問題となっている主にドイツの神学者とバルトとの対決も議論されていて、そこには問題解決に対する宗教哲学的、神学的な並々ならぬ意欲、情熱が滲み出ており、更には、文献学的な精密にして緻密な探究の痕跡も露わになっている。その意味で、バルト的なパースペクティヴからキリスト教の三一神論の神概念を研究する場合に、本書は必読の書となろう。評者も色々と本書から学ばせて頂いたことに先ず感謝したい。この点を踏まえた上で、評者は最初に本書の内容のポイントのみを、最初の目次に従って記述し、その後で評者にとって問題と思われた諸点を簡単に纏めて述べることにしたい。

一　本書の構成とその内容

先ず本書の目次を記し、それに従って本書全体を概観することにする。

はじめに
第Ⅰ部　状況内における神の問題
第一章　現代における神の問題
一　状況としての無神論　二　神学における近代主義の克服
三　イエス・キリストの出来事の事実性
第二章　現代における問いとしての神
一　問いのない時代　二　閉鎖文化の問題　三　主観主義の
自己閉鎖性　四　神としての神　五　問いとしての神

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

第三章　神から見た人間と世界
一　現代宗教における神の問題　二　神から見た人間
三　神から見た世界
第四章　宗教多元論と神の絶対性――なぜキリスト教か
一　宗教多元論の問題　二　絶対性の概念
三　一神論的絶対主義の突破　四　結論
第五章　〈聖なるもの〉における超越――受苦による超越
一　超越の類型　二〈聖なるもの〉の類型
三　神の受苦可能性　四　真の超越を求めて
第六章　現代におけるイエスとの出会い――希望なき時代の希望について
一　信仰職制会議　二　アジア的状況の中で
三　希望の灯の消えゆく中で　四　終わりなき夜の希望の詩
五　救い主はだれか
第II部　新しい神概念の探究
第一章　神の存在の対象性――研究ノート(1)
一　神の存在の非対象性――H・ブラウンの場合　二　信仰告白における神の存在――H・ゴルヴィッツァーの場合
三　生成における神の存在――E・ユンゲルの場合
第二章　なにゆえに「自然神学」の新しい可能性なのか
一　新しい問題提起　二　概念規定の問題
三　出発点の確認　むすび
第三章　神概念の転換――E・ユンゲルのバルト解釈を手がかりとして――研究ノート(2)
一　神の神性の確立　二　神の人間性の実現
三　神の知解可能性
第四章　神論における無神論――研究ノート(3)
一　無神論の類型　二　絶対的超越性の要求
三　批判原理としての無神論
第五章　生ける神――教義学的考察
一　神について語ること　二　三一の神　三　創造する神
第六章　神概念の類型的構成――方法論的序説の試み
一　宗教学の区分として　二　神論の二つの断面
三　神概念の五類型　四　展望
第III部　新しい神概念から見た世界と人間
第一章　終末論的良心――カール・バルト『倫理学講義』を手がかりとして
一　内在的良心と超越的良心　二　内在的良心の挫折
三　神学における良心論の位置　四　超越的良心の動的現実性
第二章　カール・バルトのルター理解
はじめに　一　学生時代　二　牧師時代の説教準備の中で
三　神学形成期の中で　四『教会教義学』の形成の中で
五　倉松論文への疑問　むすび
第三章　キリスト教から見た生と死
一　問題の出発点　二　生と死の五段階
第四章　西田幾多郎とキリスト教――滝沢克己の思索を手がかりとして
一　接触の原型――第一期　二　対話の深化――第二期と第三期　三　肉迫と拒絶――第四期　四　往還二相の接点

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

第五章　弁証法神学と科学
はじめに　一　弁証法神学の課題と目標　二　神概念の転換
三　自然科学との折衝
第六章　新約聖書における和解論の神概念
一　新しい時代の戦争と平和　二　自爆テロのエートス――ベトナム戦争からイラク戦争へ　三　啓蒙の自己矛盾と近代化　四　新約聖書における和解の神　まとめ

右の内容において、第Ⅰ部一章では、単なる理性主義や知性主義では宗教や信仰は解決できないことが述べられ、神学での近代主義は、信仰と知解の弁証法としての神学認識論（＝バルトのアンセルムス研究書『知解を求める信仰』、一九三一年）によって成就されると考えられている。二章では、和辻哲郎の『鎖国』からヒントを得て、閉ざされた文化の衰退や主観主義の自己閉鎖性を突破するには、バルトの「新しい神概念」としてのイエス・キリストの啓示における神が必要であることが説かれる。そして、イエス・キリストの出来事には、一人の人間イエスの死と復活が結びついているので、このような神は、人間の理性にとっては、永遠の問いであり続けることが強調される。三章では、著者は近代主観主義の内容を人間の自我絶対化と見なし、この主観主義的エゴイズムは、対象化による観察や実験から生じてくる科学的世界像の理論的自然理解が大掛かりな科学技術として応用され始めると、前面に踊り出てくると言う。しかも科学的世界像の前進によってニヒリズムの生ずることも看破されている。四章では、「キリスト教の絶対性」と神そのものの絶対性が混同されてはならないとされながら、J・ヒックの『宗教多元主義』所収の諸論文やP・ティリッヒの『組織神学』での批判的現象学や日本の古谷安雄氏や島薗進氏の多元主義的な宗教研究に対する評価や批判も語られている。更に、「神の絶対的一性」という用語は、N・クザーヌスによって初めて用いられたことが述べられ、また、神の内在化による人間の自己絶対化の理念として、I・カントの「超越論的自我」の絶対性、フィヒテの「絶対的自我」、シェリングの「絶対者」、ヘーゲルの「絶対知」あるいは「絶対精神」が挙げられている。五章では、従来の超越の概念内容に対して、「受苦可能性」がそれとして、しかも、三一神論の神のみがそれに当て嵌まるとされている。六章では、現代には「希望」ではなく、「生きることに耐え抜く」ことが、また、希望のモデルのヤコブではなく、悲しみの預言者エレミアが、スイスのバーゼル大学のバルトの亡き後のM・ロッホマン教授に賛同しながら、ふさわしいとされている。

第Ⅱ部と第Ⅲ部では、第Ⅰ部の土台の上に、神探究とその神概念による世界と人間理解が語られている。先ず、第Ⅱ部を簡単に概観すると、一章では、バルトの論理に即しているE・ユンゲルの神の存在の理解を肯定している。二章では、二十世紀のヒトラー的な人間の「啓示可能性」にすり替えられている「自然神学」概念が避けられ、バルト神学から新しい概念世界が探られている。また、M・ルターの自然神学に対する拒否や二十世紀のかの有名なE・ブルンナーとバルトとの自然神学論争についても詳論されている。この論争の背後には、自然神学

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の可能性を残している「ドイツ・キリスト教信仰運動」に、ナチへの迎合姿勢という政治問題も存したことが指摘されている。三章では、バルトの神概念に対するユンゲルの解釈を手がかりにして、有神論と無神論、形而上学とニヒリズムの対立を超えた所に、しかも独我論、神秘主義的かつ排他的な一神教を超えたP・ティリッヒに見られる「三一論的一神論」が新しい神概念として示されている。バルトのこの時期の神論は父、子、聖霊の三位格が「固有分与論」であるが、これが「相互関入論」に対立されて展開するのを批判するユンゲルの考えを著者は示しつつ、しかも、K・ラーナーの三一論と対論した、ユンゲルの論文「〈経綸的三一論〉と〈内在的三一論〉の関係」（一五四頁）での両方の三一論の一致と連関させて、三位格の「固有分与論」と「相互関入論」との両者がバルトの『教会教義学』I／1の『プロレゴメナ』では訂正、再解釈され、両者が一致させられていると述べられている（一五六頁）。ユンゲルでのバルト解釈を右の如く修正しつつ、著者は「神の存在は生成においてある」（一五四頁）というユンゲルのテーゼに賛同している。神概念の支配する思考とこれに対する反逆としての無神論との対立を超えた所での、神概念の転換が、つまり、「真の神にして真の人」なる三一神への「謙虚で開かれた神認識」への転換が力説されている。四章では、現代において神を真にリアルな神として論じる神論の構築の前提として、無神論の持つ積極的な意義と役割が論究されている。ヘーゲルの初期の論文「信仰と知」（一八〇二年）の末尾での「思弁的聖金曜日」の意味も、神概念の相対化、「絶対的超越性の喪失を克服して、絶対的超越性の要求を回復するために近代形而上学が提出した神概念」（一七三頁）と見なされ、この自己矛盾は、ティリッヒの矛盾提示（六一頁）と類似していることが示されている。著者の考えは、絶対的超越性の要求が徹底され、有神論から反転した決定的無神論を最後迄歩み切った後の「神の死」によって初めて、批判的原理としての無神論が成り立ち得るということである。このようなメタ思考（一七五頁）による無神論の批判原理は、歴史上の教会や神にも妥当すると見なされている。しかし、久松真一の「無神論」は、この線上にあるとは見なされてはいるが、「絶対他者」ではなく、「絶対自者」（Ganz-selbst）がこの「自律的な他律」の宗教の根底には存するとして、「覚の宗教」は、対話なき独語（モノログ）の宗教に終わると、批判されている。五章は、「生ける神」の「生ける」の教義学的考察であり、六章では、著者による神概念の五類型（二〇九頁）が中心的に究明されている。A型からE型迄での神と見なされるものが、次のように分けられている。A型では人間の崇拝の対象となる力あるもの一切。B型ではA型の中で形態を持つもの一切。C型ではB型の中で人格として現われてくるもの一切。D型では、最高主催神としての独一神。E型では最超越者でありながら、自己啓示する父、子、聖霊の三一神、と。

第Ⅲ部は、人間と世界に関わりをもつ右のE型の三一神という著者の所謂「新しい神概念」から世界と人間が見られている。一章では「終末論的良心」が中心的に論究され、二章ではバルトのルター理解が、バルトの学生時代以降の活動の各時期に従って示されている。三章では、「生と死」が以下の如く五

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

段階に分けられている。①生物としての、②動物としての、③人間としての、④個体としての、⑤精神としての、「生と死」として。四章では、滝沢克己の第一義と第二義のインマヌエル（＝神われらと共にあり）が手がかりとされて、「西田哲学とキリスト教」が、西田のキリスト教との接触が四期にわけられて順次論究されている。ここでの核心は、西田哲学の「包括的場所の論理」は第一義と第二義のインマヌエルの対立と断絶のままに両者を包括するが、バルトでは第一義のインマヌエル（神はすべての各人のもとに現在する）が第二義のインマヌエル（新約聖書のイエス・キリストと結びついた排他的原理の神）に先行するという図式が認められないということにある。五章では、バルトを代表者とする弁証法神学での神学的科学批判が試みられている。というのも、用語「弁証法神学」は、「人間に対して優越的に出会う神（または超越者）と人間が対話をするときの思考の特徴を意味する表現」（三〇八頁）に由来しているのに対して、この神学が「危機神学」とも呼ばれるのは、神の内在化によって自我や人間の絶対化という近代文明の危機をこの神学が強調したが故であることが示されている。そして、第Ⅰ部一章の概論でも述べたアンセルムスの「知解を求める信仰」（fides quaerens intellectum）を「知解するために我信ず」（credo, ut intelligam）から理解するバルトの現代神学の認識論が究明される。最後の六章では、三一神での和解の倫理の出発点が、新約聖書の以下の五ヶ所に求められている。①ロマ五・八―一一、②二コリ五・一八―二一、③エフェ二・一四―一八、④コロ一・一九―二三、⑤ロマ一一・一五。

以上が、本書の要点を評者が目次に沿って纏めたものである。

二　本書の問題点について

残された紙面で、以下に評者にとって問題と思われる点をごく簡単に記しておきたい。最初に述べたように、本書はバルトの考えを基盤とした神学的な大著である。が、第一の問題点は、著者が本書で最も強く主張する点ではあるが、諸宗教の神概念が相対化され、三一神のみにおいて絶対的超越者が啓示される（二一四頁）という点である。旧約聖書をほぼ同一教典とするユダヤ教やイスラム教はイエスをキリストとは認めず、仏教も三一神論の神を絶対的超越者とは理解しない。しかし、カトリックも第二バチカン公会議（一九六二―一九六五年）以降は、それ迄は神を立てないので宗教とは認めなかった仏教をも宗教と認めざるを得なくなってきている。その上、新約聖書にも神と一なるイエス・キリストが神に従う時が到来すると述べられている（一コリ一五・二八、ヨハ一〇・三〇）。また宗教哲学的には、宗教経験は、少なくとも世界宗教では根源的には通底しており、唯その表現形態が各宗教での文化、伝統、風土、言語等々によって相違してきているにすぎないと理解され得る。しかも、滝沢の語る「第一義のインマヌエル」（「神われらと共にあり」の原事実）が、「第二のインマヌエル」（原事実のイエス・キリストを介しての自覚）に先行し、万人によって万人に共通の霊性によって自覚される時が、二〇〇一年九月一一日のアメリカの世界貿易センターを中心とする多発テロにお

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

いて、到来していると理解されるのである。諸宗教に通底する神経験が、正に今、万人によって求められる時と理解されるからである。

第二の問題点は、西田哲学の絶対無の場所で「内在即超越、超越即内在」（『西田哲学全集』岩波書店、一九六五年、四五九頁）が絶対矛盾的自己同一的に成立することからすると、超越即内在のみの視点で神概念が考察されるのは、最早時代の要求にふさわしくないのではないかという点である。絶対的超越者の内在化のみではなく、逆に内在的超越の視点からも、つまり、人間が個的自覚を深めて「世界の自覚」の開けへと自らの内からも外からも開けて行くという、これ迄とは逆の、後期の西田哲学的な視点も、キリスト教には開けているのではないかという問題である。内在的超越が、著者の述べるニーチェ的な近代的な人間絶対主義に至らないで済む方向は、T・ボーマンや有賀鐵太郎のハヤトロギアで主張されている旧約聖書の生成し、働く、働きと一なる神や新約聖書の、西谷啓治の指摘するケノーシス（フィリ二・七、kenosis「自己空化」、『西谷啓治著作集』第一〇巻、創文社、一九八七年、三一頁）にも示されている。久松の無神論での「自律的他律」が対話なき独語の宗教に終わると本書では批判されているが、久松での無神論は、場所論としては語られてはいないものの、久松の主張するFAS（F＝Formless Self 無相の自己、A＝All Mankind 全人類、S＝Superhistorical History 歴史を超えて歴史を創ること）の内で考察されているので、語られてはいないが、当然「自律的他律」は常に同時に「他律的自律」でなければならない側面を含んでいる。何故なら、禅定では、個は無心であり、自律と他律の区別は超えられているのだから。久松の「自己」は無相であって、森羅万象の真の自己に通底しているので、森羅万象との対話が当然成り立つ筈なのである。

第三の問題点は、第Ⅲ部一章での、生と死の五段階で、五段階目に「精神としての生と死」が挙げられている（二七四頁）ことである。本書の著者も述べているヘーゲルの絶対精神に見られるように、近代的な自我や人間の絶対化の方向を作り出したのは、正に精神ではないか。というのも、評者は、「精神的な生と死」の後に内在的超越者にして同時に超越的内在者でもある「絶対無の場」の開けとしての神の「大なるいのち」、「永遠のいのち」、「根源的いのち」が経験されなければ、人間の精神の生も耐え切れないと思うからである。

第四の問題点は、先述のアメリカでの多発テロ事件以来、キリスト教のみならず一切の宗教は、歴史上の自らの悪の自覚なくしては、最早生き永らえることはできないのではないかという点である。本書は、キリスト教の著者の所属宗派でのみ妥当はしても、その外では妥当しないことを評者は恐れるのである。十五年程前に京都フォーラムの初代座長の物理学者の今は亡き禅者のS京都大学名誉教授が、「キリスト教は、今迄の歴史を振り返ってみると〔人殺しの宗教〕に見えますね」とニコニコ微笑みながら語られた言葉が、評者の心から決して消えて行かない。この言葉は、すべての宗教に当て嵌まると理解しており、しかも評者への自戒の言葉ともなっているのである。

NII-Electronic Library Service